

「わたしのエプロン」
千木良悠子

役者は各々、違う色のエプロンをつけている。

- A (赤)
- B (青)
- C (緑)
- D (ピンク)
- E (白)
- F (黄)

●第一場

A、B、C、D、椅子に腰かけている。音楽とともに台詞が始まる。

彼らは台詞を言いながら、顎を触ったり首を傾げたりしているが、次第にそれらの仕草は反復され、ダンスのようになる。

B「あの、私、どこから来てここにいるのか、わからないのですが、ここにいるわけで、それってやっぱり理由があるんじゃないかと思うんですよね。人はわけもなくこんなところに座らないし、あ、わけもなく座る人もいるかと思うんですけど、私の場合はわりと理由を持ってたり、持たない場合は、探したり？ だから探さないといけないと思ったんですよ。私がここにいる理由を。すぐには見つからないかもしれないけれど、思い出せる範囲で、少しずつ、ね……なんか、乾いてますね、口が。（唾を飲みこんだり、咳をしたり、苦しそう）」

A「私は、ここにバスで来たんです。でも、梅が丘から直接来るバスは出てなかったから、一度経堂で乗り換えて……その先は覚えてないですね。私、すごく記憶力がいいから、なんでも覚えているほうなんだけど、今日は何を覚えていたのかを、忘れちゃったみたい。私の声聞こえます？ 私は聞こえない。すごく耳の中が静か。たとえば、鍾乳洞にピトンピトンと水滴の垂れる音が響いてるのって、静けさを強調するでしょ？ 今は無音すぎて少しうるさい。うるさいね、私……なんだか腹が立ってきた」

C「さっきからずっと電話してるんだけど、相手は私の話聞いてないみたいだし、向こうも何言ってるかわからないし、電話しててもしょうがないじゃない、と思って切りました。でもまだザーザーと風のような音がして、柳の枝が揺れている……そんな風景が見えるから、ビデオ通話だったのかも。その景色に入りたくて、足をスマホの液晶画面に突っこんでみたら、あたりが暗くなって、ここにやって来たのですが、柳どころか何もない。電話すらない」

D「穏やかな気持ちで、海の上を漂っている。お腹に波がかぶさる。洗い流す。疲れや汚れをきれいに拭い去って、私をどこかに連れてってくれる。本当に大変な日々だった。小さなことで落ちこんだり傷ついたり、必要もないのに忙しくしてた。焦らなくちゃいけない理由なんて、何もなかったのね。手足に藻が絡みついてくる。波が次第に荒くなり、鼻や口に水が入ってくる。苦しいけど、私は泡を見ている。顔の周りに大量に泡が生まれて、海面に立ちのぼっていく様子が面白い。海中で体を回転させながら私は祈っている。家族のことや、友人のこと……他人の幸せを祈るつもりが、懐かし

い顔は祈るたび、記憶の中からひとつずつ消えていく」

四人の仕草のダンスが次第に連動していく。最後は全員立ちあがり、ユニゾンのダンスをする。

●第二場

A、B、C、Dが舞台上にいる。どうやら全員かなり年配らしい。

A「ああ、ここ……」

B「ここですか？ 私も、ここなんですけど」

A「まだ一人しか来てない。あれですよ、誰に誘われていらしたんですか？」

B「それは……あれです、あの人ですよ」

A「わかった。あの人でしょう。ね？ でもじつは私その人に会ったことないんです」

B「えっ、そうなんですか。じつは私もなんです」

A「ハハハ……なんか、ヘンな感じで」

B「本当にヘンな感じで」

二人、和やかに笑っているが、体は一度も対面しない。

C「ここ、何時からって言われました？」

D「えっ」

C「私は、午後一で、一時くらいかなーって」

D「私、時間のことはよくわからなくて。そもそも、ここに来ようと思って来たんじゃないかと、気がついたらいて」

C「ずいぶん曖昧な」

D「ええ、曖昧な」

C「いいんですかね、こんなことで。だって、これってあれでしょう？」

D「だから、私は特に何も」

C「困ったなあ。先が思いやられるなあ」

D「何が始まるんですか？」

C「わかりませんが、ご自分で考えたらいかがですか？ でっかい頭ちょっとは使わないと。ボケますよ、いい年なんだから」

D「それ、どういう意味？」

C「だって、おたくもう七十歳越えてるでしょう」

D「(年がわからなくなる) ……ええと」

C「私は、七十七。でも物忘れもないし、足腰もしゃんとしてる。昔からダンスをやっている。今でも現役で踊っていますよ。この間は、若い人たちといっしょに発表会に出たんだから(踊る)」

D「踊ってらしたんですか」

C「講師もやってたの。教室は今、娘が継いだけれどね。そう、踊りに関係あることだった。やっぱりそれしかないんだ私には。あなたはどう？ 踊り、やられる？」

D「いや、踊りは全然」

C「なんだ(露骨にガッカリする)」

D 「舞台をやってました。そこでちょっと踊ったことあります、ヘタですけど」

C 「あら、やるんじゃない！ じゃあ、演劇？ 女優さんなの？」

D 「そんな立派なものじゃ……」

C 「じゃあ、私たちやっぱり舞台の仕事をするんだわね、ここで」

CとD、椅子を持って退場。

AとBのいるところにEがふらりと入ってくる。

E 「あの、ここで、演劇やるって聞いて来たんですけど」

A 「ああ」

B 「よろしくお願いします」

A 「……来ないんですね」

E 「えっ、誰が」

A 「言い出しっぺの人ですよ。ご存知ないですか」

B 「本当に、遅いですね……バスかな？」

E 「さあ、私はちょっとよく……」

A 「私も、今日来るとき、梅が丘からバスに乗ってきたんですけど」

B 「(さえぎって) あ、私は自転車で来たんですけど」

A 「ああ、自転車」

E 「演劇やるとか言ってたから、なんか、体動かしてたほうがいいんですかね」

B 「あ、ストレッチとか？」

E 「でも、初めて会ったから、まずは……自己紹介とか」

A、B、怪訝そうな顔。次の台詞の間に椅子を持って退場。

Eが、演じている役者自身の自己紹介をする。

E 「中尾ちひろです。私は上ふたりお兄ちゃんがいて、すごい可愛がられて育ったんで、だいたい何やっても『可愛い』って言われるから、幼稚園のときは『アイドルになりたい』って言うてたらしいです。とにかく目立ちたがりやアホやってみたくて、小学校入るときも、女の子はみんな赤いランドセルっていうのを知らなくて、紺色のランドセルがかっこよかったんで『これ買おうて』って親に言ったら、親も『買うたらこうたら』で、行ったら、田舎の学校だったんで、ぼっこぼこに大騒ぎになって。『もう学校いきたくない』みたいになってたら、おかんが『ちょっとあんた習い事でもしたら？ テレビ出たい？』って言うから、『出たい出たい』って。で、児童劇団みたいなところ小学校一年生のときに入ったのがきっかけで演劇を始めました。歌とかも得意やったし、そっちのほうに合ってたみたいで、居場所ができて。そんで『学校行ったらもいいよ』みたいな感じになって、学校行くようになって。

高校ぐらいで一回事務所変わって、そこでアイドルみたいな仕事もしてたんです。サンミュージックの養成所やったんですけど、可愛い子が多くて、『あたしのほうが芝居も歌も上手いのに、全然仕事来うへん』みたいな感じになって……そのとき、化粧とか何にもせんで、『もさかった』から。で、こんなつまらんわーと思いつつ、ヘンなアイドルみたいなのをしながら大学行って。バンドとかやりながら遊んで、その頃、たまたま東京で大きな劇場の芝居のオーディション受けたら出れて、それはすごい面白くて、で、大学卒業したら東京へ来たろって。それからフリーなんですけど、劇団の芝居出たり、他のに出たりしてます。

最近はお笑いの芸人さんにコントライブに呼んでもらって、自分の中ではお笑いにも興味が向いてるんですけど、同時にちっちゃい声でボソボソしゃべるやつにもよう呼ばれるようになって。『朝ご飯さ、作るから。ウィンナー食べる？』みたいなやつ。でも、おっきい声でギャーッとしゃべるほうが好きかなーと思います。子供のときはファミリーミュージカルみたいなやつで、ドラマとか映画も出てたけど、やっぱり生の舞台が一番好きですね。なんで今でも、お芝居やってるのかわかりませんが、やめる気がしないから、やってるって感じです」

●第三場

Eが舞台に残っている。F、入ってくる。

F「あれ、みなさん、どこ行かれました？」

E「そのへんにいると思いますけど」

F「ちょっと、呼んで来てもらえますか？」

E「ああ、あなたがもしかして例の……言い出しっぺの方ですか？」

F「違います。その方お忙しくて、来られなくなっちゃったみたいなんですよね。ああ、でも、他の人いないんじゃないか、困っちゃったな、どうすんのかな」

E「あ、じゃあ、すぐに他の方、呼んで来ますね」

A、B、C、D、どやどやと入ってくる。

F「どこ行ってたんですか？」

B「あっちのほうに川があるってこの人が言うから（とAに）」

A「ワニもいましたよね（興奮している）」

B「鳥がキレイでしたよねえ、ピンクで」

A「ええ、雲みたいに群れて。て。（Dの服を触って）そう、ちょうどこの袖みたいに、ピンクで」

B「そしたら、真っ黒いボールみたいな蚊の大群が襲ってきたんで、逃げてきました。でもちょっと刺されちゃった。怖いのは伝染病よね」

E「ああ、マラリアとか……日本脳炎とか」

B「うん。でも、なっちゃったら、なっちゃったで、それまでよ」

D「はは、怖いこと言わないで。私もいっぱい刺されちゃいましたよ」

A「私も。腕がほら、パンパンに腫れちゃって」

一同、腕やら足やら搔きはじめ、止まらなくなる。

F「あの、お痒いかもしれないんですが、ちょっといったん蚊のことは忘れていただけますか。まずはみなさん、どういう目的でここにお集りになってるかお分かりですか？」

C「舞台をやるんでしょう？」

B「やっぱり、そうなんですね。私もハッキリとは確信が持てなかったけど」

E「私はわかってました（得意げ）」

D「演劇？ ダンス？ ジャンルとしては、どんなものになるんですかね」

F「それは自由です、みなさんのやりたいものをやりたいように、やればいい。せっかく有志でこういうコミュニティー・センターに集まったんだから」

D「コミュニティー・センター」

B「地域住民が、好きなとき、好きなように使える場所ですよ。演劇でもダンスでも、卓球でも体操でも何でもやっていいんです。懐かしい、私、よくこういうところ利用してましたよ。大学のことからずっと役者やってましたからね。世田谷区の稽古場だったら、だいたい行ったことがあって、松沢区民集会所とか代沢東地区会館とか……でもここは来たことないですね」

A「ここは、渋谷区ですかね？ でも、なんでまた急にこんなところに集まって知らない人たちと芝居を……台本もないのに。稽古したものは、どこかで発表できるんですか？」

F「いや、私はただここを予約しただけで」

B「自分たちで、どこか劇場を借りて、公演を打てば良いんじゃないの」

C「ああ、それだったら、私の知り合いが、ホールを持ってるから、安く貸してくれるわよ」

B「いいですね、楽しそう」

A「でも面白いかどうかは、ちょっとやってみないと、わかりませんよね。みなさんがどのくらいご経験があるかも、わからないわけだし」

D「私、遠慮しておこうかな。突然こんなところに混ぜられても……ブランクがあるので、自分の納得行く演技が、たぶんできないと思うんですよね」

B「そんなハイレベルなこと、誰も求めてないと思いますよ」

A「だいたい、台本もないわけだし」

C「埒があかないわね。いったん、ちょっとお開きにして、休憩しませんか」

●第四場

一同、ばらばらと散らばる。音楽。全員でミズスマシの動きのようなダンス。

A「ここって、なんだか、池みたいですよ」

D「え」

A「魚、泳いでますよ。黒いのが五、六匹……ほらほら、そっち行きました」

D「わっ」

A「さっき川があったでしょ？ こっちのほうまで泳いだのかもね」

D「……失礼ですけど、おいくつですか？」

A「私、六十八歳」

D「見えないわね」

A「よく言われます。でも、子供四人も産んでるんですよ。いちばん上は男の子で、就職して裁判官になったんだけど、こないだ結婚して。孫もできたんです」

D「へえ。私は娘がひとりですよ。まだ結婚もしないで、フラフラしてますね」

A「でも、今の人は、関係ないからね。年齢とか。私が若い頃は、もう二十五過ぎるとクリスマスケーキって言って」

D「うん。私、一度離婚してるんですよ。若いとき、焦って一度結婚しちゃったのよね。それがちょうど、その『クリスマス』だったかな」

A「私も、何度離婚しようと思ったか、わかんないですよ。離婚しときゃ良かったって今になって思うんだけど、年取るにつれて、きっかけがなくなっちゃって（AとD、和やかに笑う）」

ミズスマシのダンスは続いている。

B 「鳥の声が聞こえますね。『キエー』だか『ギエー』だか。さっきのピンクの鳥かしら」
E 「ピンクのは『キエー』というより、クワックワックワッって感じでしたね」
B 「あ、そうね」
E 「そういえば、昔、鳥を飼ってて」
B 「どんな鳥？」
E 「文鳥なんですけど、水浴びを長くさせすぎたみたいで、体が乾かなくて、死んじゃった。焦ってドライヤーを当てたら、それは熱すぎたみたいで、足が弱っちゃって。止まり木を握れなくなっちゃって。ある朝、籠の底に落っこちて死んでました」
B 「あら、かわいそう……それから後、動物は？」
E 「その頃の彼氏が動物が好きで、いろいろ飼いました、柴犬とか合鴨とかうさぎとか。うさぎは好きで、たくさん飼ってましたね。私のことうさぎに似てるって、その彼が言ってました。似てますかね？」
B 「どうだろう？ 私は、よく、鳥に似てるって言われる。鶴とかだちょうとか、首が長い系の」
E 「ああ。孔雀に似てる」
B 「孔雀？ それは喜んでいいんだか、なんだかわかりませんがね」
E 「孔雀に見えてきました。（唐突に）あのう、私、先日、胃に腫瘍が見つかったんですよ」
B 「えっ」
E 「今度、手術することになって」
B 「まあ。でも悪性か良性かとか、まだ分からないんですよ？」
E 「私のカンでは、あんまりよろしくない感じです。だから本当は、こんなところで、みなさんと楽しくおしゃべりしてられる心境じゃないんです」
B 「じゃあ、もうお帰りになる？」
E 「でも、家に帰ってもどうせ一人だから」
B 「そっか。とりあえずここで見学してらしたら？ もし具合が悪くなったら、すぐにおっしゃってくださいね」

ミズスマシのダンスが終わる。

●第五場

A 「私は、考えていた。脚本がないなら、自分たちで書いてみたらどうかなって。私は文章を書くのって苦手。日記もつけたことがない。一人でこっそり、自分のためだけに、家で誰にも見せない日記を書く、なんていうことに意味とかあるの？ でも、頭の中にはいつも脚本があった。まだ一度も文字に起こしたことはないが、私が言うべき台詞、行うべき動作、表情、心の動きがそこに全部書いてある。私の人生の物語。いつもそれに従って、動いてきただけ。演じてきただけ。他の人だってみんなそうだと思うの。だから今、この知らない人たち……ババアばかり？ ジジイもいる？……が集まった区民センターで、みんな自分の頭の中の脚本を出し合って、芝居をしたらいんじゃないかって、そんな考えがピョッ！ と湧いたのです。湧いただけで、黙って座ってましたけど」

B 「（Fに）リーダーさん」

F 「……私、リーダーじゃないです。頼まれてきただけなんで」

B 「私、考えたんですよ、脚本ないんだったら、みんなで考えたらどうかなって。私のやってきた演劇の稽古場では、何人かでいわゆる即興の演劇をやって、そこで出た話やネタを組み合わせ、長い

一個のお芝居にしてしまう、なんてことがよくあるんです」

C「ダンスの現場でも同じよ、フリーで踊ったパターンを組み合わせてシーンを作るの」

B「だから、とりあえず、やってみませんか、即興で」

B、Dを相手にいきなり「即興演劇」を始める。女性どうしの井戸端会議という設定。

B「ねえ奥さん、知ってた？ 裏の山中さん家の殺人事件の犯人、とうとう見つかったらしいわよ」

D「えっ、誰？」

B「聞いて驚かないでよ。山中のおじいさんの愛人だった、介護士ですって」

D「えっ、山中のおじいさんってあのかなりお年の？ 鼻に呼吸器つけてる？」

B「そう、もう八十近くの」

D「愛人なんていたの？」

B「らしいのよ。それも、五十六、七の若い女」

D「五十六って、若いの？」

B「そりゃ、八十に比べれば五十六は若いでしょ。それも財産目当てとかじゃなくて、二人は愛し合っていたらしいの」

D「愛し合っていた……へえ」

B「山中さんの奥さん、寝たきりになられて久しかったじゃない？ 長年、その介護をした女性とデキちまってたらしい」

D「で、なんで殺したの？」

B「知らない。きっといろいろあったんじゃないの？ 結局どんなに警察が調べても、本当のところは当人同士にしかわからないんだろうしね」

D「うん、当人同士にすら、わからないかもね。何かコトが起こるときって、バーッと湧いた渦の中に、当事者全員があれよあれよと巻き込まれていくしかないじゃない。終わったときには、何が起こったか誰にも説明ができない。それこそ、台風みたいに。後片付けだけが大変なのよね」

B「そうよ、大変よ、後片付けって。こないだも台風あったじゃない。あれで玄関先に並べてた鉢植えが全部倒れて割れてさ。しかも世話が雑なもんだから、よく見たらほとんど枯れてたりして……私、急に自分の生き方を省みちゃった」

D「一度反省すると、落ちるところまで落ちちゃったりするのよね。あつかましいやつなんて世の中大勢いるんだから、反省なんてしたら損するだけ、もっと凶々しくあれ、って思うようにしてるんだけど、小さい頃からの性分だから、今さら変わらないのよね」

B「うん、そういう意味では、すごく性格が良いと思う、私たちは」

二人、即興演劇を終えて、どや顔で振り向く。

A「なんなんですか、今のは」

B「即興演劇ですけど」

A「全然わかりませんでしたけど」

B「いいの、今のはあくまで材料のひとつに過ぎないんだから。こういう小さなエピソードを組み合わせると脚本を作るんですよ。じゃあ次、あなたとあなた」

F「えっ、私!？」

B「そう、まだあなた何もやってないじゃない。せっかく来てるのに」

F「はあ……でも私、お芝居ってほとんど経験なくて」

D「大丈夫、好きなことしゃべってりゃあそれでいいのよ」

AとFを残して、あとは退場。

F「お先にどうぞ。好きなことしゃべっちゃってください」

A「私、言いたいことって、特にない人なんですよね。……あなたは？ 何か言いたそうな顔してますけど、言わなくて平気？」

F「言いたそうな顔？」

A「さっきの愛人とか殺人がどうかという話、どう思いました？」

F「えっ、別にどうとも……だってお芝居でしょう？」

A「私あれ、実話だと思う。ついこないだ、ニュースで見た気がするの、老人が介護ヘルパーに殺された事件」

F「じゃあ、実話を元にお話されてたんですかね、さっきのって」

A「そうかもね。普段、お仕事は何されてるんですか？」

F「私は、スナックとバーで働いてますね。四谷のスナックと新宿のバーと、二軒やってるんです。そちら、お仕事は？」

A「私は美術モデルをやってます。美大とか絵の教室に行っ、デッサンのモデルになるんです。二十分間とかポーズを取って動かないでいて、五分休憩してまたポーズを取ってっていう繰り返し」

F「ヌードになったりも？」

A「ヌードはやってないですが、変わった衣装を着ることはあります。民族衣装とか、警察官とか…銃を持ってポーズ取ったりとか。自分では天職と思ってますけど、肉体的にはけっこうキツイ仕事なんで、体に来ます。たぶん私は腰を痛めて、そのせいで足の筋が張ったりしますね。足と腰の神経って繋がってるんだって。……さっきから何か、音が聞こえませんか？」

A「ああ、鳥の声みたいなの？」

F「いや、鳥の声はもう止んでいて、今聞こえるのは、太鼓みたいな音。だんだん近づいてくる……ほら、来ましたよ（Aの体を反対側に向ける）」

A「わっ（驚いて尻もちをつく）」

音楽。B、C、D、E、舞台の四隅で踊る。仕事の動きのダンス。

B「私は、文章の校正の仕事をしています。主なジャンルは海外旅行のガイドブック。原稿を睨みつけて間違い探しに精を出します」

C「私は、オンライン書店の会社の事務をしています。パソコンでデータを打ちこみ、息抜きに紅茶を入れてお菓子を食べて、伸びをしてまた机に向かい、引き出しを開けたり閉めたり、電話をかけた」

D「私はアロマエステティシャンをしています。ハーブを調合してお客様のお体を押ししたり引いたり揉んだり捻ったり。お心が癒されるよう、美しくなるよう、祈りをこめて、施術します」

E「私はオフィス街のスープ屋さんでバイトしています。スープをかき混ぜ、レジに立ち、お持ち帰りかイトイン、お客に選んでもらいます。湯気で右腕に火傷した。でも労災が下りたのでよしとしよう」

仕事のダンス終わり。音楽やむ。

●第六場

A「そもそも、ここってどこなのかな」

F「区立のコミュニティ・センターじゃないんですか？」

A「区民センターに川や森がありますか？ 私思うんですよ、ここはアマゾン川かナイル川じゃないかって」

F「アマゾン川？ 多摩川とかではなく？」

A「だって、ワニがいたんですよ！」

F「ワニぐらい日本にもいますよ。行ったことないんですか、熱川のバナナワニ園」

A「ないです」

F「私もないけど、すごく面白いらしいですよ」

A「バナナワニ園」

F「私はここでふと気づく。私たちが、行ったことのない所、見たことのないものばかりに思いを馳せていることに」

A「アマゾン川について語る私たちは、アマゾン川のことを何も知らない。近年、アマゾンという四文字はWebサービス会社やそのサイトも意味するが、私たちはその仮想空間内の店舗について具体的なイメージも持たぬまま、名前だけを連呼してときどき本やDVDを買う」

F「我々の日常は、消費社会に流通する物の名前ばかりで構成された、ハリボテの舞台だ。Amazon川にお金を振り込めば、日常生活に必要なありとあらゆる物がどんぶらこっこと流れてくる。もちろん桃だって買える。桃が割れて誕生した人工知能の赤ん坊は、お願いすれば何でも言うことを聞いてくれる。アレクサ、もっと音楽を盛り上げて」

音楽が盛り上がる中、AとFは即興で激しくダンスをする。

B「やるわね。あの二人……完全に即興演劇にのめり込んでるじゃないの」

E「あの、『言い出しっぺの人』の友達も、『自分、素人です』みたいなこと言ってたけど、けっこう芝居されるんですね」

C「さっき聞いたけど、映画とかもちよいちよい出てるらしいわよ。素人じゃないじゃない」

D「すっかり騙されましたね」

F「誰か、入ってきてください！（踊りながら手招き）」

A「ちょっともう場が持たないんで、早く！」

E「あ、じゃあ、私が……」

B「無理しないでくださいね」

E、見よう見まねでダンスに参加する。

F「お、踊れるね、きみ！」

E「そう？」

A「なんか台詞も言っちゃってください。全然違う話でもいいんで」

E「じゃあ、彼氏の話してもいいですか」

F「お～、いいね」

E「私、二十年ぐらい付き合ってる彼氏がいるんだけど、相手の男性は奥さんがいるのね」

A「あらあら」

E「でもどうしても別れられなくて、相手の方は喜寿も過ぎて、気がついたら私もそろそろ還暦で」

A 「これ、演劇なの？ ただくねくねしながらしゃべってるだけじゃないの」

F 「どんなところが好きなの？」

E 「うまく言えないけど、幸せだったのかもしれない」

F 「どんなふうに幸せなの？」

E 「一緒にいると、奇跡が起きたんですよ。風で雲が動いて日の光が翳るでしょう？ 部屋の空気の色刻一刻とが変わっていく、その色の違いが毎秒はっきりと目に見えるんです。言葉を使わずとも、鳥や虫、太陽や雲や庭に植わった椿の木の葉と話をすることができた。詩人じゃないから、言葉じゃうまく言えない。芝居で演じてもいいですか、私と彼が縁側に腰かけてお茶を飲んでいるところを。

(A、F以外に向かって) 誰か彼の役、やっってくださいる？」

Bが立候補する。

B 「お茶が、うまいねえ」

E 「おいしいですね」

B 「うまいねえ、お茶が」

E 「本当においしいですね」

B 「おいしいねえ」

A 「……うーん、あれが恋する二人の会話なの？」

F 「まあ、端から聞けば、あんなもんなんじゃない」

E 「山中さん」

B 「んー？」

E 「私、病気になっちゃって。もしかしたら、先にお迎えがきちゃうかもしれません。そしたらあちらで先に待ってますね」

B 「いっしょに往きますか？」

E 「いいんですか」

E、立ち上がってBの首を絞める。

B 「ちよっ、ちよっ、ちよっ、苦しいんだけど！」

A 「キャー！ ちよっ」と

F 「何してるんですか！」

A、F、C、D、止めに入る。E、Dに羽交い締められる。

B 「もう、何なのこの子……信じられない」

A 「だいじょうぶですか？」

B 「ええ、私はだいじょうぶ (ごほごほ咳をする)」

D 「あなた、今の本当の話？」

E 「何がですか」

B 「殺したのね？」

E 「殺したのかもしれない」

A 「ヒーッ」

E 「でも、本当に覚えてないんです。どうやってあの人の首に手をかけたのか、果たして手をかけた

のか、実際は鈍器、そう、花瓶か何かで殴ったんじゃないかな。（手で花瓶の形を作り）あのお宅の床の間には大きな花瓶がありました。つるんとした青磁の花瓶で、春は梅や桜、夏はりんどう、秋は菊、冬は椿の花を生けて毎日奥様の寝ている部屋に飾っていました」

A「あの方、長台詞もなかなか上手ね」

D「これ芝居？ それとも実話？」

E「あの家で、先生と奥様のお世話をしているときは幸せだった。私、それまでは人のお世話なんて好きじゃなかったんです。介護ヘルパーになったのも成り行きで、やめたくても転職する勇気がなかっただけ。ずっと上司にも派遣会社にも怒られ通しで……本当は女優になりたかったから、私」

D「才能あると思うよ。花瓶で殴ったの？」

E、花瓶で頭を殴る所作のダンス。

E「花瓶で殴ったのかもしれないし、首を絞めたのかもしれない。（E、BやCやDを相手に、次々と殺人の所作のダンスをしながら）包丁か花切りバサミで刺したのかもしれないし、ガスをひねって一酸化炭素中毒させちゃったのかもしれない。あの人死に間際にどんな顔をしたか。声を出したのか。その記憶を取り戻したい。彼との思い出を全部拾い集めて、標本のようにピンで留めて番号をつけて箱に並べたいのに」

B、C、D、E、暗闇の中で笑う。

B「そりゃ無理よ。人の記憶って曖昧なもんだもん」

C「忘れることは忘れちゃうのよ」

D「必要なことしか思い出せないもんよ」

C「そんなことより、あんたもこの豆の皮剥くの手伝ってよ」

E「豆の皮？」

B「人手が足りないの。見ればわかるでしょう」

E「これ仕事なの？ お金もらえるの？」

C「お金じゃ幸せにはなれないからね」

E「えー。私、お金ほしい」

B「この先持ってったって荷物になるだけよ」

D「働きましょう。ほら、しゃべってないで、さっさと手を動かす」

B、C、D、E、椅子に腰かけ、各々のエプロンに盛られた、えんどう豆の皮剥きをするパントマイムをする。パントマイムはそのうちダンスになる。やや暗くなる。椅子を手にB、C、D、E、退場。

● 第七場

A、F、歩いている。

A「私、何が幸せって、やっぱり食べたいものを食べたいときに食べられることだと思うんですね。こないだね、レバ刺しがどうしても食べたいなと思って、友達に電話したんですよ。それでね、最初は『ねえ、元気？』って言うわけです。そんで相手が『うん、元気』とか言いますよね、そしたら、

『何してた？ご飯食べない』って言うわけです。レバ刺しとか焼肉とかいう単語は口に出さないのね。で、『何食べよっか、ねえ何食べたい？』って聞いて、相手が『ホルモン』と言ったときの嬉しさたるや！（A、飛び跳ねる）その気持ちって、まさに幸福感って言っていいんじゃないかしら」

F「それで、レバ刺し食べに行ったんですか」

A「はい。幸せって、なんでもないところに転がってるんですよ。そのへんのジャングルの木陰にもうっかりね。えっと、私たち、何をしにきたんでしたっけ？」

F「確か、狩りか猟をしてくるように、頼まれたんじゃないかな」

A「何を捕まえてくれば良いんでしたっけ？ 野ブタか、うずらでしたっけ」

F「いいえ、確か魚ですよ。（二人でカヌーを漕ぐダンス）……釣れた、釣れた」

F「釣れましたね。早く村に持って帰りましょう」

A、F、歩き出す。

F「さっきの話の続きなんですけどね、幸福の話なんですけど。私、神様みたことあるんですよ」

A「えっ」

F「神様ってね、形はないんです。大きいプールみたいなもんでね、世界の全部が、その大きいプールで、私たちはそこに浸かっているだけなんですよね」

A「プール」

F「本当は、私たちっていうのもなくて、そのキラキラ輝くプールに浸かっている単なる輪郭でしかなくて、自分っていうものはないんですよ。宇宙には生も死もなければ、過去も未来もなくて、時間って無限に続く現在の連続なんですよね。知ってました？」

A「それは……どういうときに分かったんですか？」

F「新宿に住んでる女友達の家泊まって、夜中におしゃべりしてたら、不意にそのことに気がついて。あー、そうだったのかって」

A「（気味悪そうに見ている）」

F「もちろんノードラッグ、ノーアルコールですよ」

A「なるほど」

F「そのキラキラのプールに浸かっているっていう感じは、とても幸福でしたね。生きているだけで嬉しいと思いました。そのとき恍惚としながら、大マジメに語っていた気がする。みんな気づいてないだけで、本当は太陽の燦々と差す広い道の上を、堂々と歩いているんだって。道を誤る人なんていない、ただ余りに広い道幅だから、周りに何も無いように見えて不安になるだけなんだって」

A「いいなあ、そんなふうに思えるなんて。私なんて毎日不安だらけです」

遠くのほうにBがいる。

B「あっ、いたいた、もう、どこまで行ってらしたんですか」

A「ちょっとカヌーで川を上って、魚を獲りに」

B「何言ってるんですか。ダンスのレッスン、もう始まっていますよ」

（Cがダンスのステップを、D、Eにレッスンしている）

C「そうね、そうね、いいわね。上手だわ。じゃあ、次はオリジナルのステップを作ってみましょう。材料は……そうね、（Eに）あなた、今、悩みある？」

E「私、報われぬ愛に苦しんでいます」

C「そうしたら、報われぬ愛に苦しむステップを作りましょう。それについて思い出すと、どんな気

持ち？」

E「こんな感じ？」

C「いいわね、じゃあ、その動きを発展させてみて」

E、Cの出すステップを真似て、一連のダンスを完成させる。

E「報われぬ愛に苦しむ動き」

C「あなたは？ 何か今、悩みある？」

D「強いて言えば、左の股関節がイカれちゃってうまく動かないことかな。左のハムストリングも引きつるし、あと内臓も悪くて、十二指腸に潰瘍が二、三個できてるんですよ」

C「じゃあ、足が痛い、お腹が痛い、苦しい、というダンスを作りましょうか」

D「(踊りながら)でも、一番の悩みは男運が悪いこと？ どうも天才肌にも弱いらしくって、日常生活が全然できない男に、振り回されちゃう。私が支えてなんとか世に出してやりたいって、つい思っちゃうんだけど、それじゃなかなか幸せにはなれないわね」

C「じゃあ、それ、全部組み合わせたダンス作りましょうね」

D「(すごく複雑なダンスを苦勞してやる)」

C「(A、B、Fを振り向き)あなたたちは、どんな踊りを踊るの？」

B「踊りは全然……強いて言えば、盆踊りみたいなやつなら」

A「私、ジャズダンスやってたんですよ。だから、こんなこととか(踊る)こんなこととか(踊る)できます。1、2、3(ピアノに合図する)」

A、陰鬱な音楽に合わせてジャズダンス。他の人々、拍手。

● 第八場

暗転後、Aにライト。

A「私は生涯で四人の子供を産んだはずなのに、彼らの顔を覚えていない。亡霊のようだ、顔は目の前に現れては、また別の人物の顔になって、消えていく。男なのか女なのかもわからない。私は、追いかける。待って、お母さんよ。お母さんがここにいるのよ。(追いかけるが、つかみ損ねる。)彼らには彼らの生活があるのだと納得しようとする。独立して伴侶を見つけ、日々あくせくと働いているに違いない。だが、ふと気がつく。私は何歳で、何人子供がいるんだっけ。急に自分が少女であるかのように思う。そうだ十七歳、十七歳だ」

A、学生時代の設定で芝居を始める。

A「私は高校に通っていて、同じクラスの男の子が好きだった」

F「谷口さん、佐々木くんのこと好きなの？」

A「うん」

F「私も好き。私たち、ライバルね」

A「うん。私は毎日佐々木くんの気を引こうと頑張った。バレンタインの日には手作りチョコレートを渡したし、部活の終わりに濡れたタオルを持ってたりとか、ベタなことしたの。私はなんといっても若くて可愛かったしクラスの人気者だったから、すぐに付き合うことになった。千木良さんはフラ

れて泣いていた。でも私たちは受験勉強に忙しくて、一回クリスマスの日にキスただけで、後は何もなかった……千木良さんは佐々木くんと同じ大学に入って、いつのまにか、彼と付き合っていた。楽しいことたくさんしたんだろうなあ、これじゃどっちが勝ったかわからない」

F「楽しいことなんか、全然なかったよ。あいつ、じつはすごい男尊女卑のモラハラ男だった」

A「私は佐々木くんの顔も覚えてはいないのに、千木良さんの顔はよく覚えている。そう、こういうふうにおカッパで、目が大きくて鼻が丸くて口が小さくて痩せてて、少し私に似ていた。ねえ、なんでちょっと似てるのよ？」

F「似てないよ、バカ言わないでよ、錯覚だよ」

A「大嫌い！」

F「私だって、好きじゃないよ。ひどいなあ、もう」

A「なんで、あなたなのよ！ 私、旦那も子供もいたし、お父さんもお母さんもいたのよ。可愛くてモテたから、付き合ってた男の子もいっぱいいた。死ぬほど好きな人だっていたのに、なんで、思い出せるのあなただけなのよ！」

F「知らないよ、たまたまでしょう。当たらないでよ」

A「わあっ（と泣き出しかけて）……ああ、お芝居を続けなきゃ」

F「無理しないで」

A「だって、たぶんこれ、私ができる最後のお芝居なんだから」

F「どうして？ 演劇やめちゃうの？」

A「やめたくないけど、もうきつとできなくなるもの。できなくなるもの……」

A、舞台の隅に行き、一生懸命ジャズダンスの振りを練習している。

Bが登場する。

B「友達がいたのよ。自殺しちゃったの。ああ、詳しいことは聞かないでよ、思い出すと辛いんだから。死ぬ直前の時期にずいぶんよく会ってたの。何もしないよりはましだろうと思って、彼の部屋に行って、黙ってただ一緒にいたり、『生ゴミ溜まってる！ さっさと捨てなさいよ、僕はやんないからね！』っておどけたふりして怒鳴ったり、そんなことでまあ、少しは元気出るんじゃないかって思ってたの。でも結局、死んでしまうわけじゃない？ 本当に何もできないんだ、と思ったら力抜けちゃってね。フラフラと、よくその頃住んでた家の近所の川べりを歩いてたの。川の中に汚い藻が、黒い影になって漂っているのが見えて、街灯に照らされて光ってた。ゆらゆら泳いでいる姿がちょっと人間ぽくてじっと見てたら、自分の体みたいな気がしてきてね。いつそ川の中に入って藻を抱きしめて頬ずりしたいなあと思って、結局しなかったけど、あのときの感覚は忘れないわね。住宅地の川っぺりで、完全に一人っきりののに、誰かがそばに寄り添ってるような気がして、それが誰かっていうと自分なの。

それからは楽しいときでも、あの感覚が消えない。虚しいんだか、頼もしいんだか、わかりやしないわね。結局、自分の最後に傍にいるのは自分だなんて（最後のほう、盆踊りのダンスを交えて）」

C「いいステップね、もうちょっと、動きにメリハリつけてみましようか。いいわね、三十歳は若返って見えますよ」

B「二十歳（はたち）くらいに見えますか？」

C「見える、見える。十七歳にも見えるわよ」

B「（苦笑）十七歳にだなんて、戻りたくないな。別に何があったってわけじゃないけど、いろいろ辛かったもん」

D「(体の痛みと、男に尽くすダンスで、そこに参加しながら)若いときなんて、辛いことばかりよね。私も良いところの生まれなんで、両親が厳しくって、抑圧された青春時代を送っちゃった…」

D、学生時代の芝居を始める。

D「勉強ばかりしてた。イヤになる。毎日宿題宿題宿題、放課後は急いで塾塾塾、で、遊ぶ暇なんかありゃしない。家でヘッドホンして大音量で音楽聞くのが唯一の心の解放区よ」

B「ねえ、ちょっと。あんた」

D「えっ、何」

B「そのレコード、僕も持ってる。他にどんな音楽聞くの？」

D「えっ。×××とか、〇〇〇とか」

B「僕もそういうの大好き。ねえ、塾終わったら飲みに行かない？ いい店知ってるんだ」

D「飲みに？ ……私は外でお酒を飲んだことがなかった。家で一人で、よくパパのウイスキーとかブランデーとかコッソリ開けてたけど、誰にも打ち明けたことはなかった。声をかけてきたのは、数学の塾で同じクラスのますだ君。その日初めてちゃんと話した」

B「二丁目だけど、いいよね」

D「うん、いいよ。じゃあ、後でね。……胸がドキドキした。生まれて初めての冒険だ、と頭の中で声が出る。先生の話なんか全然耳に入らなくて、講義が終わるやいなや、ますだ君と連れ立って、夜の街に足を踏み入れた」

B「ここ、行きつけの店なの。みんな知り合いだから、気楽にしていよ」

D「ウン」

C「あら、こちらのお嬢ちゃん、お友だち？ めずらしいじゃない。いつこうちゃんが友達連れてくるなんて」

B「塾がいつしょなんだ。前から話が合うんじゃないかと思ってたんだ。今日初めて、ちゃんと話すの」

D「私は泣きそうだった。私を見つけてくれた。こんな子がいるんだ、夢じゃないんだと」

B「(泣きそうなDに) あ、ごめんね。この店、演歌ばかりかかるんだよね。ロックの話しに来たのに、なんかヘンだよねえ。ねえ、ママー！ なんでこの店演歌ばかりかかるの？ もっとカッコイイのかけてよ！」

C「だってしょうがないじゃない、そういう店なんだもん。あんた、店のコンセプトに文句つける気？ ボトルも入れたことないくせに生意気だね」

B「んだよ、結局金かよ。(Dに) ホントはもっとカッコイイ人がいっぱいいるお店に行きたいんだけど、他知らないからしょうがないんだ」

C「こんな垢抜けない、モヤシの髭みたいにヒョロヒョロした高校生、入れてくれる飲み屋なんて他にないよ。感謝しな(飲物をドンと置く)」

B「イヤッ、もう信じらんない」

D「(笑う) たぶん私は王子様に見初められたシンデレラより嬉しかったと思う。友達ができるときって、ものすごい速度で物事が進む。ジェットコースターに乗ってるみたい。好きな音楽の話 pensando 存分して、会うたびにレコードの貸し借りをして、お小遣いを貯めて飲みに行った。嫌いだった塾の曜日が楽しみになった。受験が終わって、大学に入っても、私たちは友達だった。前みたいにしょっちゅう会うことはなくなっても……何かあれば連絡して近況を伝え合った。やがて私は忙しく

なり、子を産み、離婚して一人娘を懸命に育てあげ……ふと気づくと六十歳を過ぎている。インターネットのSNS経由で知人から知らせを受け、ますだ君が病床にあって、もう長くないことを知る」

B「なんかねー、骨髄の病気で、国の難病指定受けてるのになっちゃって。補償金が出るから、他のメジャーな病気になるより良かったっちゃ、良かった？（笑う）」

D「（笑えないでいる）」

B「考えてみれば長いよね、ユカちゃんとも。高校の塾がいつしよだったってだけで、十七歳から気がつけば四十年以上か。どうして仲良くなったんだっけ」

D「塾の帰りに、飲みに行ったんだよ、二丁目に」

B「あ、そっか。あのママとか元気かなあ。とっくに死んでるかなあ。……あれ、ユカちゃん、どうしたの。泣いてんの。泣かないでよお、あんただってそのうち死ぬんだから。今さら、生きる死ぬで泣く年でもないでしょう。って、そんなことないか。葬式によっては、爺さんも婆さんもメソメソ泣いてることあるもんね」

D「私はお礼を言っていなかった。あのとき、私を見つけてくれたお礼を。でもなんて言ったらいいのかわからない。細く長く、モヤシの髭みたいにヒョロヒョロと友情が続いたのは、はっきり言って奇跡だ。旦那とも娘とも、ここまで長続きする関係を築くことはできなかった。ねえ、ますだ君」

B「なに？」

D「顎、食べこぼしてる、ここ」

B「うそっ、もうやだー！ ああ、あんなに美意識の高かった自分なのに、アートとハイカルチャーを愛してヨーロッパにまで渡ったというのに、老いていくのねえ、老いさらばえて、醜くなっていくのねえ、でもしょうがない、受け入れるしかない。ユカちゃん、私、言ってなかったことがある。塾であんたに声かけたとき、本当はあんたのこと、嫌いだったの」

D「えっ」

B「あんたが仲良くしてた、ヨネミットシカズくんっていたでしょう。成城高校の。私、あの子のことが好きだったの。もちろん彼、ノン気だったんだけど、好きで好きでたまらなくて。高校違うのに頑張って近づいて仲良くなって、『好きな子いるの』って聞いたら、あんたの名前を出すからさ。憎らしくなって……オレが取っちゃおうと思ったんだよね。女とヤツたことないけど、ホテル連れ込んで噂にしてさ。そしたら、あいつあきらめるじゃん。それか酒飲ませてベロッベロに酔わせて、親に電話して塾から追い出すとか。でも飲んでみたら、あんた強いじゃん。全然酔わないじゃん。バカバカしくなって、やめちゃった。あんた、酒強くて良かったね。危うく、処女喪失の相手が僕になるとこだったんだから」

D「いっこうちゃん（泣いている）」

B「泣くなよ、ブスだなー」

D「どうせブスだよ、悪かったな」

B「開き直んなよ。あんた美人だよ」

D「ああ（髪掻きむしり）、テメーに言われても仕方ねえんだよ」

B、ニコニコと退場。

D「彼が六十五歳で死んだ後、私は孤独に地味に細々暮らして、ある朝突然天に召された。享年なんと九十八歳。ま、大往生だね。おかげで私の葬式じゃ、だーれも泣いてなかった。みんな酒飲んで笑ってた。別に良いけどさ、ちくしょー。でもなんで死んだのか、全然覚えてないんだ。年が年だから老衰で心臓止まったのかなとか、確か内臓が悪かったっけ、とか考えるけど、違うかも。なぜか

『洪水がやってきて、川か海に流された』ってイメージが浮かぶんだけど、私が死んだ年に、人が流されるほどの大洪水なんてあったっけ。交通事故に遭ったとか、車に轢かれたって言葉に近いものを感じるけど、それよりも『ジャングルでワニに襲われた』とか『ジャガーに食いちぎられて大量失血した』、なんて言い方のほうが合ってる気がする。本当はどうなんだっけ？」

●第九場

A、Cが椅子に座って豆の皮を剥くダンスをしている。

A「知らないよ、ジャガーがどうしたって？ 今日結婚式で忙しいんだから、夢みたくないこと言っ
てないでちゃっちゃと手を動かす」

D「また、豆の皮むき？」

E、入ってくる。白いベールを顔にかけている。

D「あなた誰と結婚するの？」

E「好きな人」

D「誰が好きなの？」

E「顔が思い出せないの。名前もさっきまで覚えてたのに」

D「そんなんで結婚できるの？」

C「結婚なんか誰とだってできるわよねえ。昔は見合い写真だけで結婚したんだから」

A「そうそう。顔も名前もわからなくなっただけでね、好きな相手と結婚できるってのは、そりゃ幸せよ」

E「行ってきます」

A「しっかりね。私たちも、もう行こう」

A、C、D、E、豆の籠を持つパントマイムをして、歩き出す。

B、Fも出てくる。E、中央にひざまずく。

D「あれっ、花婿は？」

A「現れないわね。どこかで酒飲んでるのかな？」

D「誰か呼んで来てあげないの？」

A「私たちも知らないのよ、相手が誰だか」

D「そんな状態で、結婚式を開こうとしたの？」

C「だってこの子がやりたいって言うんだもの」

E「私、一人でも結婚します」

B「よろしい。神様の前で誓いを立てなさい。汝は誰だか分からない名無しの権兵衛を一生の伴侶とし、病めるときも健やかなるときも支え合うことを誓うか」

E「誓います」

B「誰だか分からない名無しの権兵衛は、自分のことを思い出してもくれない女を一生の伴侶とすることを誓うか」

C「……返事がありません」

B「では、誓いのキスを交わしなさい。何かそのへんの岩とでも」

E「(岩に口づける)」

B「これにて結婚式は終わり」

盛り上がらない結婚式が終わり、一同解散しかける。E、退場しかけたかと思いきや、戻ってくる。

E「思い出した。私、殺してなんていなかった。ただ、ちょっと戯れに相手の首に手を回したときに、中断するように全然違うことが起こったから、抱いた殺意だけが宙ぶらりんになったのだ。

私、自分が病気だって分かってから、一人で死ぬのがあんまり怖くて、頭の中で、何度もあの人のこと殺してた。包丁で刺したし、花瓶で殴った。あの家の台所の、包丁の柄の木目模様から刃の光り具合までつぶさに思い出して、さあどうやって刺すか。血は何色か。彼はどんな表情で何を呟いて息絶えるのか。マスコミが来て、テレビや新聞や週刊誌に載る所も。一度想像した光景を何度も頭の中で再現して、あの年の春の初めを過ごしてた。死ぬ間際まで一度も安らかな気持ちになんかなれなかった。だから、死んでもずっと哀しい気持ちが続いてる」

● 第十場

BがEの横に立つ。

B「好きな人を傷つけたいと思ったこと僕もあるよ。誰だってあるんじゃないの」

C「頭の中じゃ何考えてたって分かりやしなないもんね。もっとえげつないこと考えてる人間だっているでしょうし」

D「でもじとじと暗いことばかり考えてると、自分が傷つくからねえ。お勧めしないわ」

E「私って暗い性格なんですよ。自分を表に出せない」

D「出させてくれなかった相手も悪いんじゃない。本当は結婚だってしたかったんでしょ」

E「あんまりお互いの気持ちを打ち明けられるような関係ではなかったかもしれません」

B「ストップ、昔の男の愚痴は後で聞いわ。今は演劇の舞台を完成させねばならない、大事なときよ」

E「ああ、忘れてました」

C「ここままで、だいたいいろんなシーンを演じてきたから、後はこれをなんとかまとめて、一本の作品にすればいいだけね」

D「こんなのどうやって一本にすんの」

B「しかし、みんな本当生きてる間いろいろあったのね。おつかれ」

A「ってか、芝居してて気づいたんだけど、私たち、みんな死んでない？」

B「そうなの、死んでたのよ」

D「死んでた。驚いたことに、私、享年九十八歳だって。生きたね、生きまくったね」

C「私も忘れてたけど、死んでました。もうずっと前から、電話をかけてもかけても繋がらないって気分だったんだけど。やっとどこかに繋がった気がする」

D「ところで、私たちって今何歳なの？」

B「死んだら、年齢とかないんじゃないかしら。何歳にもなれるの」

D「私、別に何歳でもいいや。今のままでいい」

A「私、いくつに見える？ 今どんな顔してる？」

それぞれの顔を見合い、互いに微かに頬に触れ合う。

D「ああっ！」

B「どうしたの？」

D「何もかも、全て思い出しそう。生きていたときのことを。でも、思い出してしまったら、その瞬間に全部忘れそう」

A「私も。もう少しで子供の顔が浮かんできそう。でも思い出すのが怖い」

D「忘れるのはイヤだ、だって、どれもこれも大切な思い出だもの」

B「……思い出したら、忘れそう、思い出しそうで、忘れそう」

「思い出しそうで、忘れそう」というダンスを少しする。

E「せっかくだから、もう全部お芝居にしちゃいませんか」

D「どういうこと？」

E「あのね、私たちの生きてたときの記憶を全部舞台にするんです。（Fに）ここ何時まで借りられるんですたっけ？」

F「世田谷の区民センターだったら夜十時までだけど……でも、ここって明らかに区民センターじゃないですよ」

C「管理人さんもないみたいだしね。誰かに注意されたら、出て行けばいいんじゃないかしら？」

E「全員分やると相当、時間がかかるとは思うんですけど……私たちが生きてる間に経験したことを、最初から順番にお芝居にしていくんですよ。わかりますか？ で、やりながら、お互いに見るの。そしたら、本人が生きてたときのことを忘れちゃっても、他の人が覚えていてくれるでしょう？」

B「どういうこと？」

D「よく意味が飲み込めないわ」

E「できそうにないですかね？」

A「私、できそうです。今、誕生のオギャアという瞬間から始まって、全部思い出せそうな状態になってるの。脳がすごく活性化してる」

C「私も今、お母さんのお腹の中にいたときのことぼんやり思い出しかけてます。今すぐにでも舞台上で表現できますよ」

E「全て、演じるんです。私だったら五十六年かけて」

D「自分自身の一生を？ 私、九十八年かかるわよ。そんなの見る気ある？」

E「見ます。見てたいです」

D「全部やるの？ トイレに行ったり、鼻ほじったり、人に見せられない恥ずかしいことも全部？」

E「やれるものなら、ぜひすべて」

B「何やったって片っ端から忘れていきそうだから平気よ。好きにやりましょ、でも正直に」

A「私、やりたい。全部思い出せる。お母さんのお腹から突然追い出された日のこと。全身に物凄い圧力がかかって、周りの壁に勢いよく血液が巡り出し、見渡す限り真っ赤だった子宮から真っ白い光の降り注ぐ外界へと飛び出していく。やってもいいでしょうか？ では僭越ながら、私から始めさせていただきますね（赤ちゃんになってゆく）」

●第十一場

暗転の後、Eに照明が当たる。

E「私たちはやった。一番長い人で九十八年かかるわけだから、全員でざっと五百年近くかけて、私

たちの人生全ての瞬間をこの森の中の小さな舞台で演じあげた。みんな死んでからご飯も食べなくていいし、トイレにも行かなくていい。休憩なんて必要なかった、夢中になって演じた、長かったー！……でも、楽しかったの。五百年なんて過ぎてしまえば一瞬、あっという間ね。何もかもみんな夢みたい。けれどもさすがに上演時間五百年、そんな舞台に皆様をお付き合いさせるわけにはいかないので、しかたない、今回のこの公演では、ダイジェスト版のみをご覧ください」

AとCに照明が当たる。

C「(エプロンを引っぱり)お母さん、おやつ」

A「うるさい、今手が離せないのよ！ だいたい、なんであんたはいつも泥だらけなの、どこで遊んできたらそんな松崎しげるより真っ黒の全身泥まみれになれるの？ 早くTシャツ脱ぎなさい！」

C「う……(泣きそうになる)」

A「ああ、ごめん……苛々してた(Cを抱きしめる)。そこまで怒られるようなことしてなかったね、うるさいのはお母さんのほうだったね」

C「ふえーん」

A「ああ、お母さんも泥まみれだよ、晩ご飯、泥ご飯になっちゃうよ、いい？」

C「いいよお、泥ご飯大好き」

A「食ってから言えよ、このヤロー(頭を撫でる)」

Bに照明が当たる。

B「(部屋で寝転んでいる)あー、暑いわ。秋なのに暑い……なんでここにいるんだろ。なんでこんな四畳半の部屋で、一人で寝転んでるんだろ。きっと理由があるはずなんだ。あ、今日芝居の稽古休みになったんだ。それで急に時間空いちゃったんだ。前から見たかったあの映画、見に行けばいいじゃない。チャンスじゃない。もうイヤねえ、独り言癖になっちゃって。なんかテンション上がってきちゃった。栗ごはん作ろ(立ちあがる)」

C、Eに照明が当たる。椅子に座っている。

C「(オフィスで電話中)もしもし、××部長いらっしゃいますか？ じゃあ折り返しお電話いただけますでしょうか……(デスク横の同僚に)ちょっと何、勝手にインターネットしてんの」

E「これ、旅行のサイトっす。今度の休みに彼女と金沢行くっす。これは金沢の茶屋町？ なんか古い屋敷がいっぱいあるとこっす」

C「風情があっていいね、柳の並木道……でもそういう家で調べてよ」

E「寺田さん厳しっす」

C「厳しくない。上司なんだから、当たり前」

E「いつも肩肘張って生きてる寺田さんの弱い部分、見てみたいっす。いつか俺に惚れねーかなって正直、思ってるっす」

C「マジメに仕事してよ」

DとFに照明が当たる。

D「ずっと海に来たかったんだよね。まさかあんたと来れるなんて思わなかった」

F「私、お弁当作ってきた。海岸で食べよう」

D「波って、見てると吸いこまれそうになる。地球が始まって以来、こうやって無限に揺れてるわけでしょ、気が遠くなる」

F「光が黄色い。卵色」

D「すでに西日っぽいよねえ。江ノ島ぐるっと回る時間あるかなあ」

F「もういいよ、そのへんでビール買って道で飲もう」

D「あんたがそうしたいんなら、そうしよう」

F「もっと言えば、私はデートで今日来たかった」

D「それは私にはどうにもできないから、江島神社の弁天様に祈りなさい」

F「そうする」

EとBに照明が当たる。

B「お茶が、うまいねえ」

E「おいしいですね」

B「うまいねえ、お茶が」

E「本当においしいですね」

B「おいしいねえ」

E「あのね、私、病気になっちゃって。もしかしたら先にお迎えがきちやうかもしれません。そしたらあちらで先に待ってますね」

B「いっしょに往きますか？」

E「いいんですか」

E、Bの首に手をかける。Bは受け入れる。E、そのまま手に力を入れるかと思いきや、動きを止める。

E「大きな獣の音がする、叫んで暴れているみたい。だんだんこっちにやってくる」

ライトの中にF。役者本人が経験したエピソードを何か話す。

F「2011年の3月、震災のニュースを見ながら、私は自分の人生にやり残していることがあるんじゃないかと考えていた。そうだ、人を集めて、お芝居をやろう。私は小説やエッセイを書いているし、演劇もずっとやっているから、人からよく劇団を主宰したらどうかと勧められることがあった。大変そうだからと避けてきたけど、今やらないときっと一生やらない。

お金ないけど、劇場とかギャラリーって幾らぐらいで借りれるのかな。考えながら散歩していたら、渋谷の文化村の向かいに、新しいライブハウスができていた。すいません、私、演劇の舞台を作ろうと思ってるんですけど、ここ一日幾らで借りられますかね？ レンタルはやってない？ 内容で審査するから企画書を持ってきてほしい。なるほど。

私は、スーザン・ソントグの『サラエボでゴドーを待ちながら』というエッセイからの引用を含む企画書を書いた。ソントグはボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が起きた時に、現地に赴いて、市街に銃弾の音が響く中、演劇を上演したそうで、予想を超えた数の観客が訪れてベケットの『ゴドーを待ちながら』を楽しんだという。『痩せて非力な自分は東北にボランティア活動に行っても大して役に立たないだろう。その代わり、どこにでも持って行って上演できる少人数編成の演劇作品を創ろうと思う。』

世の中に不安が蔓延している緊急時にこそ、人が集まり文化に触れる場所を作ることが重要だ』と、私は企画書の中でもっともらしく訴えたが、大風呂敷を広げてしまったという気恥ずかしさだけがあった。

けっきょく同年の十月に『わたしのエプロン』を初演することになった。知り合いの俳優に出演依頼をして、世田谷区の区民施設の貸し出しシステム『けやきネット』に登録し、区民センターを借りた。稽古が始まると、部屋でネットのニュースを見てクヨクヨしているばかりだった日常が一気に変化した。夜になれば、徒歩や電車や自転車で続々と稽古場に集まってくる俳優たちと会える。不安や心配事をシェアしながら稽古する。私が家で孤独に書き綴った台本を読み上げて演じてもらえる訳で、むしろ向こうに助けられたって感じだ。

それ以降、年に一、二回ぐらい公演を行っているし、時々出演もするけれど、やっぱり未だに私はそこまで演劇が好きか分からない。こうやって人前でしゃべるのは苦手で、今も胸がドキドキして体がカーッと変な気分だ。なんで私、こんなことしてるの。恥ずかしくなってきた。もうイヤだ、逃げ出したい、何もかもなかったことにして、家に帰って布団をかぶって寝てしまいたい。なんでお芝居なんかしなくちゃいけないの。ねえ、言い出しっぺの人！」

●第十二場

照明がつくと、6人が並んでいる。

- B 「川がキラキラと輝いている」
- A 「それは道のようにも見える」
- C 「眩しくて前が見えない」
- D 「どこか懐かしいような」
- F 「何もかも新しいような」
- E 「行こうと誰かが言った。六人のうちの誰かが。もう私たちは溶け合って、言葉も声も区別できない」
- A 「森を抜けて、川を越えて、私たちは漂っていく。ワニの背を撫で、ゾウの足の間をくぐり、フラミンゴの祝福の歌を浴びながら」
- C 「空中に浮かんだ扉が開き、我々を中へ招き入れる。溢れ出す光に向かって私たちはゆっくりと上昇してゆく」
- D 「名残惜しいわ、名残惜しいわね」
- B 「五百年もへたな芝居打って、まだ言うの？」
- E 「ねえ。最後にみんなで踊りませんか。何か記念になるようなものを」
- C 「良いわね、では始めましょう」

静かで単調な音楽。エプロンを左右に揺らすダンス。

- A 「（踊りながら囁く）さようなら」
- B 「（以下も小声で）さようなら」
- C 「おつかれさま」
- E 「ありがとう」
- E 「ご来場、ありがとう」

最後に全員揃って、エプロンを取り外して高く放り投げる。それを再び受け止めて、抱きしめる仕草。
Fだけがエプロンを床に落としてしまう。めいめい、光の差すほうに退場。

D「(エプロンを拾い上げ) あら、これ、あなたの？(手渡す)」

F「(エプロンを受け取って抱きしめる) うん。これ、わたしのエプロン」

暗転。

終幕。